

「天の父の愛」

創世記 第1章 26節～31節  
マタイによる福音書 第5章 43節～48節

説教 岡村 恒牧師

「こうして、天にいますあなたがたの父の子となる」(45節)この日、主イエスが語られた言葉を、集まった大勢の人々は、食い入るように聞いていました。幸いについて語る主イエスの言葉を聞いて、はるかかなたに望み見ていた神の国が、いきなり目の前に現れてきたのです。

大阪教会の明治期の牧師、宮川經輝牧師が漢訳聖書からこの部分を書き写した書が、聖堂入口のスタンドグラスの上に長く掲げられています。阪神・淡路大震災後に1階の大廊下に移されましたが、この山上の説教の前半、マタイによる福音書第5章全体が、主の日ごとに聖堂を後にする信仰者たちの目に写り、その信仰の歩みを支えたのだと思います。

山上の説教の中で主イエスは、私たち人間と神との関係が全く新しいものとなる、と宣言し、その新しい姿を描き出されました。「こころの貧しい人たちは、さいわいである」(5章3節)と語る主イエスは、十戒に光りを当て、十戒全体の本来の意味を明らかにされました。天の父の愛がどのようなものか、はっきり示されました。

ユダヤ人にとって、『隣り人』というのは、あくまでユダヤ人同胞の隣り人のことでした。異邦人については、彼らを滅ぼして下さいと繰り返し神に祈ってきました。『隣り人を愛し、敵を憎め』というのは、当時のユダヤ社会の常識です。私たちも同じような思い違いをします。神を信じる者だけを神は祝福し、神をあざける者、信仰者の敵を神は裁き、滅ぼして下さいに違いないと。そうして、まるで神が自分の復讐の道具であるかのように利用しようとしています。

神が天地を創造された時、神はすべての被造物を祝福されました。すべてのものをご覧になり、「はなはだ良かった」(創世記 1章31節)と満足されました。「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らせて下さる」(45節)のです。ところが私たちには、神の思いを探り知ることができないのです。自分を愛する者を愛し、兄弟だけに平和の挨拶をするのが私たちの実態です。

私たちは、自分の利益や、目に見える幸福、この手に握りしめることができるものに心がとらわれてしまう取税人のようです。また、神を知らず、まるで神がおられないようなように自分を自分の人生の「主(あるじ)」であるかの

ように生きる異邦人のようです。このような私たちの姿、天の父の心を知らない私たちの姿をご覧になり、主イエスは深く憐れんで、この日、この説教をなさいました。

「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」(44節)という主の言葉を実行しようとする、私たちはすぐに挫折を味わいます。しかし主は、どうしても赦すことができない一人の人のために、自分の最も大切な時間、力を捧げ、心を注ぎ出して祈りなさい、そうすると、天の父の子になるという約束がどういうことか分かるようになる、と言われるのです。

目に見えるもの、手の中にあるものにばかり心が縛り付けられる私たちを、主イエスは新しい人生へと招いて下さいます。繰り返し失敗し、挫折する私たちのために、主イエスご自身は地上を歩んで下さいました。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカによる福音書 23章34節)と主イエスは、あの十字架の上で敵を愛し、迫害する者のために祈りを捧げて下さいました。

繰り返し神の前から離れ去り、神の御心に反して歩む私たちのために、主イエスは祈って下さいました。すべての人が神ご自身の元に帰ってくることを、主イエスをお遣わし下さった天の父が望み、主イエスによって私たちに赦しを与え、命を与えて下さいました。主イエスは、ただこのためだけに地上に来て、最後まで弟子たちを、そして私たち一人一人を愛し抜いて下さいました。私たちの救いのために必要なことを、主イエスは全てなし終えて下さいました。

天の父は、この主イエスを死人の中から引き上げて下さいました。大阪教会帰天者の多くが、地上で罪の赦しの洗礼を受け、終わりの日のよみがえりを心待ちにしながら地上の旅を終えました。主の日に、この聖堂で礼拝を守り終えるたびに、この山上の説教の文字を目にして、地上の旅へと遣わされて行きました。

神の赦しの約束は確実で、そして完全です。主イエスを信じる者は、主イエスに結び合わされ、やがて終わりの日、主イエスと同じ完全な姿に変えられます。神の国に入るために必要な一切が既に用意され、与えられているからです。

(記 岡村 恒)